

Prof. A. Hill Returns

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

Season 2, Episode 4

🐷 欧米のホテルに行くとき々、バスルームにビニールのアヒルがおいてあったりする。私は2度ほど遭遇した。一度はホテルの名前まで入っていた。欧米人アヒルグッズ好き説（私が唱えている）の強力な証左と考えられるが、出張先でそういうとぼけた物に出くわして俄に私のことを思い出す研究者も多い。大変ありがたいことだ。アヒル好きであることを生命科学界に浸透させ、アヒルを見れば私を思い出す条件反射を形成せしめ、最終的にはノーベル賞選考委員会が開かれている部屋にアヒルグッズを仕込んでおいて無意識に思わず私の名前を書いてしまうよう仕向けるという実に数十年がかりの壮大な計画は着実に進みつつあると言えよう。（残された課題は、どうやって委員会の部屋を探り当てビニールのアヒルを紛れ込ませるのかという部分のみ。）そのホテルのアヒルをはるばる持ち帰る、或いはわざわざ写真に撮ると言う挙に出る先生方もいらっしやる。両者共に超著名で、前者はKS大T.Anka学部長、後者は以前にもこのエッセイに登場したO大A.Killセンター長である。T.Anka先生のアヒルは今でも大切に保管しており、以前に他の文章で紹介したこともある。そしてA.Kill先生が遙かスコットランドはDundeeの地のホテルで撮影された情景も、かなりの脱力感があって私のお気に入りなのでこの場を借りて披露しよう。

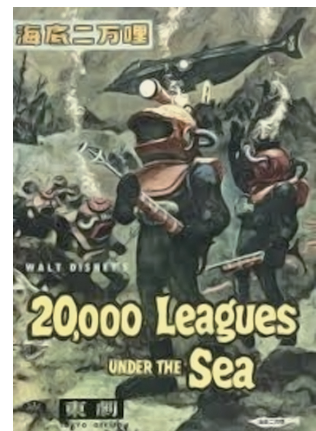


ノーベル賞が選考される部屋（想像）。



なんだかシュールである。A.Kill先生がバスルームに入っ
てこれを見つけられたときの困惑の表情が見たかった。

🐷 以前こそ我流で下手くそながらテニスを時々していたものの、ここ10年以上に亘って全く運動をしない状態が続いていた。そうすると当然のことながら腹が出て（不思議なことに体重は大して増えていない。手足が細くなって腹が出るという、地獄絵図の餓鬼の体型になっているということだ）着物を着るにはちょうど良いとか自分に言い聞かせていたが（実際は浴衣以外着たことない）、コンピューターに四六時中向かっているせいで、背中が鉄板みたいに凝るようになり、マッサージをしてくれる床屋にこんなかちかちの背中見たことないと言われるに及んで、これは何か運動せねば早晚様々な症状が噴出し悲惨な状況になるに違いないと確信するに至った。テニスなどの相手が必要なスポーツは楽しいが相手を探すのが手間だし、アスレチッククラブ入会は我が家の財務担当者に却下されたので、一番シンプルで無料の、ご近所を走るということを決めた。ところが長いこと運動していなかったため、走るという簡単なことができない。まず200mほどゆっくり走ったら、激しく動悸がして死ぬんじゃないかと思った。しかしそこで挫けてはいかんと、次の日もその次の日も生命の危機を顧みずに走った。そうすると案外死なずに少しずつなら走れる。といってもまるで海底二万哩（マイルと読むのだ。ああ懐かしい、ジュール・ヴェルヌの傑作SF小説）に出てくる重そうな潜水服を着て海の底を進んでいるような按配で、喘ぎ喘ぎギクシャクよたよたと走っていた。それを知り合いの大学関係者(庄



ノーチラス号（後方に見える潜水艦）のプラモデル作りました。ディズニーの映画も興奮した。

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活



我々には電信柱と同じくらい見慣れた物だが、外国人や他地域の日本人は、モノレールに乗っていて突然これが目の前に現れると、皆一様に仰け反って絶句する。これ絶対変だよなあ。芸術かどうか以前に心を揺さぶる変さがある。

野真代が昔歌っていた国出身の女性研究者)に目撃されてしまい、次に会ったときに彼女から「センサー、ハシッテナネ。スゴークオソカッタ。」というご講評を賜った。だいたい飽きやすいたちでマイブームはコロコロ変わるのだが、今回は何故か投げ出すことなく亀のような走り続けていると、人体というのは摩訶不思議なもので、徐々に馴れてきてスピードも走行距離も伸びてくる。最初200mで臨死体験したのが、1000m、3 km、5 kmと走れるようになり、数ヶ月経つととうとう10km走るようになった。走るのは帰宅してからの深夜で、例の爆発芸術家が国家のお祭りのどきどきにまぎれて建ててしまった超奇っ怪な塔がある大きな公園の外周が走りやすいので、家からは少し遠いが出向く。我が大学のキャンパスはその公園の隣にあるので、走っていると大学の門の前を通過することになる。ある日、門から私のラボの学生(女性)が出てくるのが見えたので、追いついて声を掛けようとスピードをあげたところ、突然その学生が脱兎のごとく走り出しすごい速さで遠ざかって行ってしまった。私はしばらく呆然としていたが、考えてみたらキャップを目深に被っていて顔も定かに見えず、防寒で手袋をはめ、黒いウィンドブレーカーにぴちぴちの黒いタイツ(本当は段階的着圧ウェアというクールなものなのだが、知らない人には江頭2:50にしか見えない)姿の中年男が走って近づいて来たら、私でも逃げるだろうなと得心した。夜中にそんなところを走るとたら警察に捕まるで〜、と同じ研究科のN.Akan先生に警告はされていたが、あの学生が警察を呼んでいたら冗談抜きで次の日の朝刊一面を飾るはめになっていたかもしれない。ストーカー教授、ランニング中だっ



おっさんが着ると、こういうモデルさんのように格好良くない。しかも私にはもっと派手な模様が着いていて見た目の怪しさが倍増されている。でもゼブラマン模様(下図参照)のものが売り出されたら、絶対買うと思う。



たと言い張る、とか。A.Hill危機一髪。ともかくも、その後も逮捕されることもなく恙なくランニングの習慣は続き、そうすると現金なもので最初は200mで死にかけたことも忘れ、二人連れのおばちゃんがぺちゃくちゃ喋りながらウォーキングしているのを颯爽と追い抜かしていっばしのランナー風を吹かすようになった(本格的ランナーに追い抜かされたときは、自分は素人だとして自己弁護)。走ること自体はいつまでたってもきついままなのだが、自分みたいな非アスリート系人間でも走れるんだという楽しさや、走った後の充実感、走りながら空の雲や山並みを見るとき気持ちよさ(昼間の場合)、途中で訪れる苦しさかふっと消える時の快感(ランナーズハイですね)が勝ってほとんど毎日走った。ところが、まあ世の中そんなに甘くなくて、幸せもつかの間でこれまたお決まりだが膝を痛めた。over-useである。年寄りの冷や水とも言う。次の日からアメリカ出張で、歩くのもままならないほど痛いのに大きなスーツケースを押すはめに。人間、やはり分相応に謙虚にしていないとばちが当たる(駄目押しに、帰国時の羽田乗り継ぎで到着が遅れたため、地上係員にダッシュさせられた。スーツケース押しながら片足で跳ねてました)。もう一生治らないんじゃないかと思えるほどの重症であったが、一ヶ月経つとめでたく回復し、喉元過ぎれば何とかで、ケロッと再び謙虚さを忘れ今日に至っている。しかし、一応用心してウィーク

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活

デイは6 kmを隔日で走る程度にセーブして、週末だけ12~20km走るようにしている。車も身体も中古は騙し騙し使わないといけない。さて我が国のランナー人口は推定1400万だそう。猫も杓子も教授も走る。メントラ業界の吉本新喜劇系O大Shi学部チャーリー浜教授は、ランニングでは私の先輩で、あちこちの大会でフルマラソンを走っている。何かの折に、「あー、早く家に帰って走りたい」と呟いているのを耳にした。筋金入りのランニング中毒である。この先生に引きずられて、私も近々ハーフマラソンに出る羽目になった。心臓が止まってぱったり倒れる自分の姿が頭をかすめるが、まあそれはそれでラッキーかも（まさか死ぬって自分が思っていないうちに死ぬるから）と思うことにする。「走る教授」って結構たくさんいそうだから（たいがい教授ってストレス溜めてるし、遊んでくれる友達少ないし）、チャーリー浜先生を総長にして、関西教授狂走連合でも旗揚げするか（すいません、板橋区で中学生していたころ暴走族が全盛だったもので。もちろん私は加入してません）。というような訳で、目下私が最も尊敬するのは、村上春樹と間寛平である。あ〜め〜ま〜。



God speed you! Black Emperor
 という我々の世代は暴走族のドキュメンタリー映画を思い出す。ところが最近、それはカナダのロックバンドのことらしい。偶然同じ名前なのかと思ったら、この映画から取ったそう。輪廻転生。

ここで話題は変わる。「トイレの神様」問題である。そもそも私は、お涙頂戴の小説や映画が嫌い、そういうものにまんまと乗せられて号泣する純真な善男善女を小馬鹿にするというへそ曲がり根性曲がりの嫌なやつである。ところが、トイレの神様を聞いたとき涙が止まらなくなった。げっ、老人化したか。でも他だとそんなに涙は出ない。不思議だ。しかも、もう内容が分かっているのに、しかも大した内容でもないのに、初回だけでは無く何回聞いても、おばあちゃんが死ぬところでふわっと涙が溢れる。腑に落ちない。何故？と首を傾げていると、テレビ番組「探偵ナイトスクープ」でこの歌を聴くたびに号泣するという4歳の男の子が紹介されていて、実際、まだ完全には内容を理解していないと思われるのに歌が流れると一緒に歌いながらわあわあ泣い

ていた（この映像がなかなか可愛い。最後にはこの歌を歌っている植村花菜本人がこの子供の家に行って歌い、子供のお母さんが泣いていました）。さらには別のニュース番組で放映されたのだが、上海万博の会場で植村が（日本語で）歌うと聞いている中国人のなかに泣く人が続出、字幕で中国語訳が流れていたとはいえ、普通そんなに泣かんやろうと、驚いた。もうこうなると、内容ではな



特にファンではないのだが…

くなにかサブリーミナリー効果みたいなものがあるのではないかと思われてくる。あるいは地震の前に動物たちが騒ぎ出すような類の未知の生物学的反応か。知り合いは、単純なメロディの反復のせいではないかと言うがそれだけかなあ。子供や日本語の分からない外国人が反応する何かがあるのに違いない。では私の場合は何？ 幼児性もしくは日本語が不得意なせいかな…。未だに謎は解けていない。この前もテレビのチャンネルを回していたら偶然トイレの神様が流れていて。速攻で泣きました。

ある日、上述の探偵ナイトスクープのプロデューサーから、電話で私に出演依頼があった。すわ私がトイレの神様で泣くことを嗅ぎつけたのかと思ったが（あの4歳児と一緒に泣く教授と違ってタイトルが浮かんだ）、そうではなくある調査を依頼したいと言うのだ。この番組は、視聴者からの様々な疑問をお笑い芸人の探偵が調査するという内容で、専門



今年のナイトスクープアカデミー賞授賞式。涙もろくてすぐ泣く西田局長（左から2人目）と関西ではモーツァルトより有名な最高顧問キダタロー（3人目。この人も天然に面白い）。尊敬する間寛平も登場（右端。この人は、お笑いとしても相当変わっている。太陽の塔とならぶ関西天然ぼけ記念物。一方で一日50km走り、海はヨットで渡り世界一周するアースマラソンを途中で前立腺癌になりながらも本当に達成してしまい、関西ではハヤブサを凌ぐ英雄となった）。

Prof.A.Hillの帰還とロジ裏生活



この人2年かけて4万km走った。!!

家の協力を仰ぐことがある。しかし内容を聞くと私の守備範囲ではないので丁寧にお断りした(元々は、東京都のR研に依頼がいき応じたのが私の知り合いのK君で、彼は探偵ナイトスクープと言うだけで反射的に私に尋ねると言ったようだ)。その話を家に帰ってしたら、家族一同にえええーなんて出演しなかったのかと詰問された。ノーベル賞よりずっと価値があるそうだ。同僚の先生や、研究室のメンバー、研究者以外の友人、周囲の全ての人々が異口同音になんてことをしたと言う。ここにいたって私も取り返しのつかないことをしたと思うに至る。そうか、ノーベル賞を取るより探偵ナイトスクープ出演のほうが世間(関西)ではインパクトがあるか… 覆水盆に返らず。ああ、私はヒーローになる千載一遇のチャンスを逃したのだ。まあいいや、まだノーベル賞があると、自分に言い聞かせるしかなかった。

私の有名人なり損ね話は、関西圏以外の人にはピンと来ないであろう。しかし、関西では探偵ナイトスクープは絶大な人気を誇り20年も続いている。視聴率30%のときもある。番組内で、番組放映中にある地域(もちろん関西)の家庭をかたっぱしから訪問して何を見ているか調べるときがあるが、たぶんやらせじゃなく半分以上の家でこの番組を見ている。この番組、登場する普通の一般人がほのぼの可笑しい。探偵が過剰な演技で笑いを取ることもなく、オーディナリーピーポーを盛り立てているだけなんだけど。東京で作るとあざとくなったりわざとらしくなったり適当な手抜きになったりしそうだが、関西人のお笑いの天性恐るべしでごくごく自然に笑いを誘う(かなり以前に大阪人はいきなりボールを投げるふりをされると反射的にバットで打つふりをする、刀で切るふりをするとか切られるふりをするというのは本当かということ調査していた。答えは、かなりの確率で真実であった。梅田の巨大交差点で信号待ちをしている人達に探偵が投球のふりをした

ら、向こう側で結構たくさんの方がバットで打つ真似をしたので感動した)。また先述の如く意図された感動シーンは嫌悪するひねくれ者の私でも、ほろりとさせられる場面も多い。巧まざる笑いと感動。また割と真剣に調査するので、全国アホ馬鹿分布図のように学会で発表するに至った例もある。最近ちょっと番組に勢いが無いようにも思うが、名作珍作を集めたナイトスクープアカデミー賞は仕事を投げ出してでも必見。最近では、フンドシをして海の男!と叫ぶのが夢の見た目ひ弱な男の子(ふんどしをぎりりと締められたときのやるせない表情が最高)、ゾンビと闘うのが夢の幼い3兄妹(実際にゾンビに扮した人が来たらもうパニックで、弟妹に裏切られ泣きわめきながら必死でゾンビに攻撃を加えるお兄ちゃんがよかった。YouTubeには英訳付きもアップされ海外でも人気だったらしい。今は著作権の問題で削除されている)、泥舟は沈まないと証明したいお父さん(左官屋さんや物理学者に協力して貰って作った泥舟にお父さんが狸のかっこをして乗る時点で笑えるが、本当に泥舟が浮いたところで感動、暫くして沈むところでまた笑える)が珠玉であった。色々紹介しているときりがないので、後は是非テレビかDVDを見て頂きたい。

ところで探偵ナイトスクープから私が依頼された内容とは「幸せを感じると手から金粉が出るという女性がいるので本当に金かどうか調べて欲しい」というものであった。うちの最先端の顕微鏡で見てくれと言われてたが、共焦点レーザー顕微鏡でも金かどうかなんて判らないです。結局、TR大の化学系の先生が依頼を受けて調べられ番組で放映されたが、真相は化粧品成分だった(結構多いトホホ系結論)。その女性嬉しいことがあると頬を手で触るのでファンデーションが手についていたのであった。周りからは非難轟々だったが、出なくてよかった気もする…

追記:

ランニングを始めるまで知らなかったが、スポーツウェアですごく進化していて、段階着圧タイツをはくと本当に足が軽くなり、関節や筋肉の痛みを防ぐことができる。ハイテクなのだ。私が使用しているのはワ〇〇ル社の製品で、店の人が女性用の体型矯正下着で培った技術だと言っていた。なるほど。ところでこの頃、江頭2:50見かけないな…

「走る教授」で、筒井康隆著「串刺し教授」を思いだした。教授の皆さん是非読んで下さい。あ、筒井には「走る取」もあったな。